

大学生における Sports Coaching Competency Test から 評価したコーチング能力の縦断的变化

A Longitudinal change on the coaching ability evaluated from sports coaching competency test in education students

飯塚 駿¹⁾ 苅山 靖¹⁾ 柴田 紘希¹⁾ 麻場 一徳¹⁾

Iizuka Shun¹⁾ Kariyama Yasushi¹⁾ Shibata Hiroki¹⁾ Asaba Kazunori¹⁾

キーワード：SCCOT, コンピテンシー, 縦断研究

【要約】

本研究は、山梨学院大学スポーツ科学部所属の学生における SCCOT 得点（コンピテンシーに関するコーチング能力）の縦断的变化について、性差に着目し検討するとともに、SCCOT 得点と学業成績との関係について検討することで、コーチに必要な資質・能力の向上に向けた教育や指導に関する知見を得ることを目的とした。その結果、学年進行（2年次から3年次）により、全対象者において有意な向上が認められた項目は「小25：試行する力」のみであった。また、性差に着目すると、男子は「小25：試行する力」のみが有意に向上し、女子は「小4：学びの対象を広げる力」のみが有意に低下した。さらに、学年進行による SCCOT 得点の変化率と GPA（学業成績）の間には有意な正の相関関係がみられた。

これらの結果から、学生のコンピテンシーに関するコーチング能力の縦断的变化や GPA との関係性が明らかとなった。しかし、本研究は2年次から3年次の限られた期間における縦断的検討であったことや、学業成績として用いた GPA にはコーチングに関係しない授業の評価を含んでいることなどの課題があるため、今後はこの点を踏まえ、より詳細に大学生のコンピテンシーに関するコーチング能力の変化について明らかにしていく必要がある。

I. 背景

日本代表チームは、自国開催となった東京 2020 オリンピックにおいて日本史上最高数のメダルを獲得し、パラリンピックにおいても日本史上2番目のメダル獲得数という輝かしい成績をおさめた。このような成績の背景には、競技力向上事業（スポーツ庁、2015）やスポーツ基本計画（文部科学省、2012）などにより、ジュニア期からトップアスリートまでの育成、強化のシステム構築やスポーツ環境の整備があると考える。この他にも国際競技力の向上のための要因は様々あるが、選手の育成や強化に直接的に関わるコーチの役割も重要な要因の一つである。また、コーチの役割は国際競技力向上のための強化に特化した指導だけではなく、普及を目的とした指導や体力の保持増進のための指導など、コーチの指導目的は多様である（日本スポーツ協会、2019）。しかし、スポーツ現場では、コーチから選手へのハラスメントや高圧的指導、体罰

等の不祥事が絶えないのが現状であり（スポーツ庁、2018）、過去には、指導の範囲を逸脱した体罰が要因となって選手自ら命を落とした事例も報告されている（文部科学省、2013）。そのため、スポーツに対するネガティブな経験やイメージからスポーツ離れが生じていることは否定できない。

上記の問題を受け、わが国では様々な取り組みがなされている。例えば、文部科学省（2015）は、グッドコーチに向けた「7つの提言」として、コーチに求められる資質・能力を明確に示している。また、日本スポーツ協会は、コーチ育成のためのモデル・コア・カリキュラムを作成し、これに基づいた各種の施策を通してコーチの資質・能力の向上を目指している。このコーチの資質・能力を評価する指標の一つに、Sports Coaching Competency Test（以下、SCCOT）が挙げられる。SCCOT は、日本のスポーツ界が求めるコーチの資質・能力として「プレーヤー中心の考えに基づ

¹⁾ 山梨学院大学スポーツ科学部

いたコーチングを行うための行動・判断力」を可視化するためのテストであり、コンピテンシーに関する能力を評価するものである（近藤ほか, 2019）。

山梨学院大学スポーツ科学部では、2019年度よりSCCOTを活用し、学生のコンピテンシーに関するコーチング能力の評価とフィードバックを実施している（荻山ほか, 2020, 2021）。その成果報告として、荻山ほか（2021）は、コーチ歴3年以上のグッドコーチとの比較から、学生の“強み”や“弱み”を提示している。これらの横断的な知見は、コンピテンシーに関するコーチング能力を向上させていくための課題や優先度を考えるための材料として有用であると考えられる。一方で、同一個人を経年的な変化についてはまだ検討されていない。このような縦断的な変化を捉えることができれば、スポーツ系学部を有する大学において、その学修効果を把握することができるとともに、日々変わりゆく学生の傾向や特徴を理解した上での授業カリキュラムの検討が可能になると考えられる。

そこで本研究では、山梨学院大学スポーツ科学部生におけるSCCOT得点の縦断的な変化を検討することで、コンピテンシーに関するコーチング能力の向上に向けた教育や指導に関する知見を得ることを目的とした。この目的を達成するために、本研究では2つの視点に着目した。1つ目は、SCCOT得点の縦断的な変化に性差があるか否かである。スポーツ系学部生の卒業後は、学校現場をはじめ地域のスポーツクラブなど、様々な場所でコーチとして活動していくことが想定される。しかし、スポーツ庁（2017）は、女性のコーチが全コーチの3割に満たないことなど、女性のスポーツ実施に関する課題を挙げ、これを解決するための一つとして女性スポーツに関する調査研究の必要性を指摘している。女性コーチの特徴を踏まえたコーチング能力の育成や支援のためにも、性差に関する知見を収集する必要がある。2つ目の視点は、SCCOT得点と学業成績との関係である。スポーツ系学部を有する大学では、コーチに必要なコーチング能力の養成も重要な学修内容の一つと考えられる。そのため、授業の学修成果がコーチング能力の養成に繋がっているか否か、その可能性について検討することも重要な研究テーマと考えた。

II. 方法

1. 対象者

山梨学院大学スポーツ科学部に所属する2018年度入学（以下、YGU学生）の188名を対象として、

2019年6月（2年次）と2020年11月（3年次）にそれぞれ1回ずつ、計2回SCCOTを実施した。本研究では、2回ともに結果が得られた男子115人、女子64人、計179人を分析の対象とした。

2. SCCOT (Sports Coaching Competency Test)

SCCOTは、コーチのコーチング能力を可視化するテストであり、コーチングコンピテンシー構造に基づいた302の質問項目から構成されている。評価項目は、「学習・活用力」、「対他者力」、「対自己力」、の3要素を大項目として設定しておりそれぞれ評価可能である。また、下位項目として、中項目（7要素）、小項目（26要素）も評価可能になっている（表1）。得点については、大項目と中項目が7点満点、小項目が3点満点となっており、各項目の点数が高くなるにつれコーチング能力が高いことを示す。このSCCOTの得点が学年進行によってどのように変化するか、またその変化に性差があるのか、さらに、SCCOT得点と学業成績との関係を検討した。

表1. SCCOTの詳細要素

大1：学習・活用力	中1：価値を見出す力	小1：価値を見出す力
	中2：伝える力	小2：情報の価値を高める力
		小3：吸収力を高める力
	中3：学ぶ力	小4：学びの対象を広げる力
		小5：気づきから学ぶ力
大2：対他者力	中4：主体性を引き出す力	小6：介入度を調整する力
		小7：客観的な根拠を示す力
		小8：多様な意見を尊重する力
		小9：主体的判断を促す力
		小10：自尊心を高める力
		小11：意見を調整する力
	小12：自己の変化に注目させる力	
	中5：多様性に対応する力	小13：内的に動機づける力
		小14：自律を支援する力
		小15：ニーズを尊重する力
		小16：独自性を尊重する力
		小17：個別に評価する力
		小18：寄り添う力
大3：対自己力	中6：変化する力	小19：柔軟に対応する力
	中7：考え抜く力	小20：プレーヤーを優先する力
		小21：出来事や感情を分析する力
		小22：役割を認識する力
		小23：課題を設定し共有する力
		小24：合理的な戦略を立てる力
		小25：試行する力
		小26：評価し把握する力

3. 統計処理

学年進行に伴う、SCCOT得点の変化を検討するため、対応ありのt検定を実施した。また、SCCOT得点と学業成績との相関関係について検討するため、ピアソンの積率相関係数を用いて実施した。なお、各検定には、統計処理ソフト「SPSS26.0 for Windows」を

使用し、有意水準は5%とした。

Ⅲ. 結果及び考察

1. 学年進行による SCCOT 得点の変化 (全体)

大項目及び中項目においては、全項目において有意な差は認められなかった (図1, 図2)。一方で、小項目については、「小25: 試行する力」のみ、2年次に比べ3年次の方が有意に高いことが認められた ($p < 0.05$, 図3)。この「小25: 試行する力」とは、「どのような場面や状況であっても想像力を働かせて課題に即したトレーニング内容を考案し、トライ&エラーを繰り返す能力」のことである (近藤ほか, 2019)。スポーツ系学部の学生は、授業で得た知識を他の授業やクラブなど実践にいかせることができる環境下にあるといえる。さらに、学年進行に伴い、演習系の授業やクラブ内でも上級生という立場で実践する場面が増える可能性があると考えられることから「小25: 試行する力」が向上したと推察される。

また、縦断的な向上が見られた SCCOT 得点は、上記の「小25: 試行する力」のみであり、他の項目に向上は認められなかった。近藤ほか (2019) の研究で

は、大項目の得点について、1年次から2年次に学年が進行することによって向上傾向であるが、2年次から3年次、3年次から4年次の学年進行では低下傾向にあると報告している。本研究においても、大項目においては有意な差は認められなかったが、先行研究同様に2年次から3年次にかけて低下傾向であった。しかしながら、中項目や小項目では低下傾向のある項目と増加傾向の項目など様々な存在していた。これらのことは、SCCOT 項目をより詳細に見た時には、学生 の特性によってその向上の仕方が異なること (個人差があること)、もしくは SCCOT の項目の中には経年変化により高まりやすい項目、低下しやすい項目、変化しにくい項目などが存在する可能性を示唆しているとも考えられる。これらを明らかにすることでより効果的にコンピテンシーに関するコーチング能力を高めるための授業カリキュラムを検討することができるため、今後、より広範囲 (学年) かつ多くの対象者を扱うこと、さらに後述する性差などの要因 (特性) に着目して分析することで明らかにすることも重要な課題であろう。

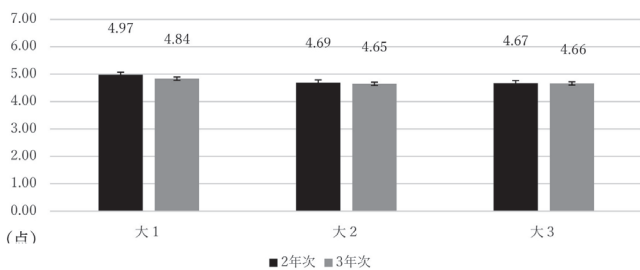


図1 学年進行による大項目の変化

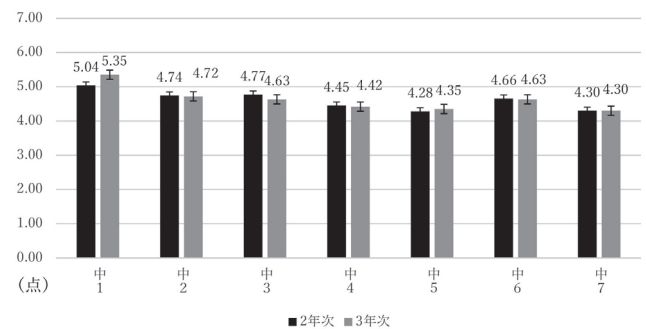


図2 学年進行による中項目の変化

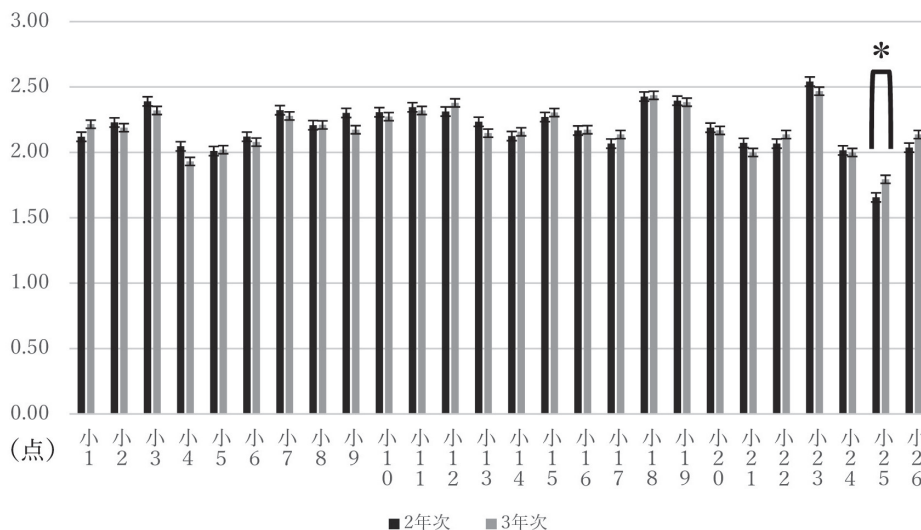


図3 学年進行による小項目の変化

* $p < 0.05$

2. 学年進行による SCCOT 得点の変化(性差)

SCCOT 得点の学年進行による, 変化の性差の特徴を検討するため, 性別で比較を行った. 男子の小項目においては, 「小25: 試行する力」のみ, 2年次に比べ3年次の方が有意に高いことが示された ($p<0.01$) (図4). この要因として, 男子は女子よりも, 全体の傾向において考察した, 授業やクラブで得た知識を競技生活や大学生活などの実践にいかす機会が多かった可能性があると推察する. 女子においては, 「小4: 学びの対象を広げる力」のみ, 2年次に比べ3年次の方が有意に低い結果となった ($p<0.05$) (図5). この結果は, 「小4: 学びの対象を広げる力」すなわち, 「興味範囲を広げたり, 異分野に飛び込んだりして一見して異質だと思われるものをつなげる能力」(近藤ほ

か, 2019) が, 学年進行とともに低下していくこと意味している. つまり, このような女子の特徴を踏まえ, 女子に対しては物事や学びに対して多角的に捉えられるような学習や教育の展開が必要であることが示唆された.

これらのことから, 学生のコンピテンシーに関するコーチング能力には性差があることを理解した上で, その能力に関する授業内容の展開や教育的指導が必要であることが示唆された. また, 今後は, 女性コーチの育成や将来のスポーツ現場のためにも, より多くの対象者を縦断的に検討していくことで, コンピテンシーに関するコーチング能力の性別による傾向や特徴の変化を明らかにしていくことが重要であると考えられる.

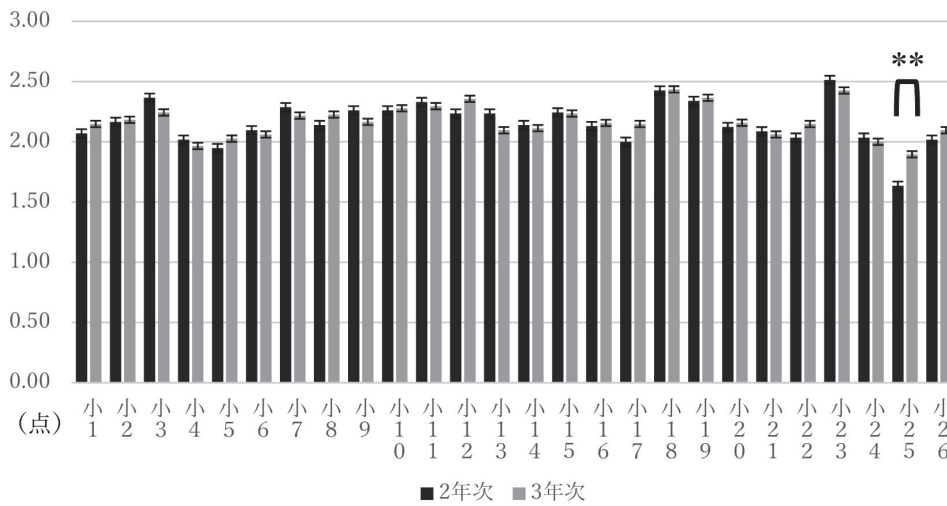


図4 学年進行による性別での変化(男子)

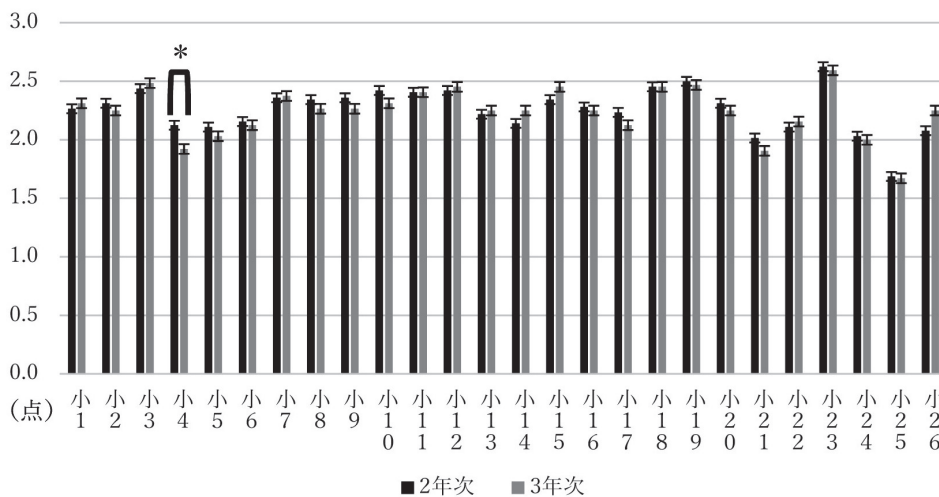


図5 学年進行による性別での変化(女子)

3. SCCOT 得点と学業成績 (Grade Point Average) との関係について

SCCOT 得点と学業成績との関係を検討するために、SCCOT 得点として、SCCOT の大項目、中項目、小項目の得点をそれぞれ合計したものを、大項目得点、中項目得点、小項目得点とし、この各項目の得点から2年次と3年次の変化率を算出した。各項目の変化率と YGU 学生の4年生前期終了時点での Grade Point Average (以下、GPA) との相関分析を行った結果、大項目の変化率と GPA の間に有意な正の相関関係がみられた (図6)。これらの結果は、GPA が高い学生ほど、2年次から3年次において SCCOT 得点がより高く向上したことを意味している。また、GPA は本学における授業の学びの成果であることを踏

まえると、本学における授業の学修成果が、コーチに必要なコンピテンシーに関するコーチング能力の養成に繋がっている可能性のあることが示唆された。しかし、上記の相関係数は低かったことから、本研究では GPA と SCCOT 得点との対応関係を明確に示すことはできなかったとも考えられる。また、本研究において算出した GPA には、全学部共通の一般科目や学部特有の専門科目などコーチングに関連する科目や関連しない科目など様々に含まれていた。今後は、コーチング関連の授業の履修者や教職課程の学生と SCCOT の大・中・小項目との関係を明らかにすることで、各学生のコーチング課題に応じた授業の選択ができるようにすることも重要であろう。

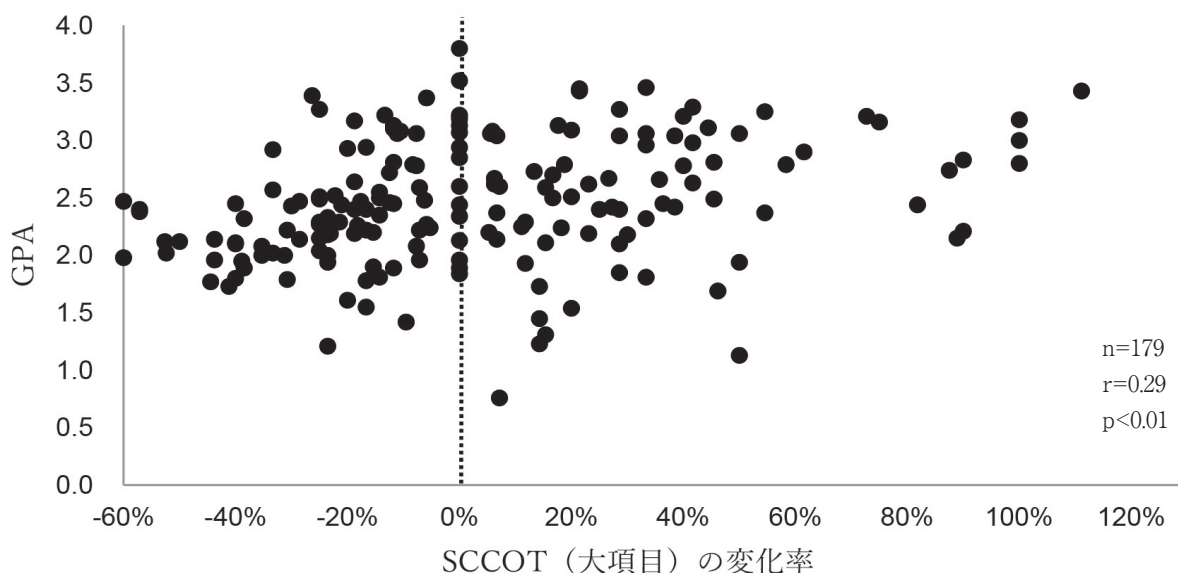


図6 GPA と SCCOT (大項目) との相関

IV. 結論

本研究は、山梨学院大学スポーツ科学部所属の学生における SCCOT 得点 (コンピテンシーに関するコーチング能力) の縦断的な変化について、性差に着目し検討するとともに、SCCOT 得点と学業成績との関係について検討することで、コーチに必要な資質・能力の向上に向けた教育や指導に関する知見を得ることを目的とした。その結果、以下の知見を得た。

1. 学年進行による変化の特徴を検討するため、男女を含めた全体で比較を行った。その結果、学年進行 (2年次から3年次) において、「小25: 試行する力」にのみ有意な向上が認められた。この要因として、スポーツ系学部の学生は、授業で得た

知識を他の授業やクラブなど実践に活かせることができる環境下にあることが挙げられた。

2. 学年進行による変化の特徴を検討するため、性別で比較を行った。その結果、2年次から3年次において、男子は「小25: 試行する力」のみが有意に向上し、女子は「小4: 学びの対象を広げる力」のみが有意に低下していた。このことから、学年進行に伴い、男子は授業等で得た知識を実践にかす機会が多いことが推察され、女子は物事や学びに対して多角的にみるができるような学びが今後の課題であることが示唆された。
3. 対象者の特徴を検討するため、SCCOT 得点の変化率と GPA で相関分析を行った。その結果、大項目における SCCOT 得点の変化率と GPA との

間には有意な正の相関関係がみられた。このことから、授業での学びがSCCOTにおける高い得点、すなわちコーチに必要なコンピテンシーに関するコーチング能力の養成に繋がっている可能性のあることが示された。しかし、本研究の結果では、弱い相関であったことやGPAには、コーチに必要な資質・能力に関係しない、全ての授業の評価を含んでいることなどを踏まえ、今後も引き続き検討していく必要がある。

謝辞

本報告及び本学におけるSCCOTの実施は、金高宏文先生（鹿屋体育大学）をはじめとする鹿屋体育大学教育企画・評価室の皆様にご多大なるご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

文献

荻山靖・神田忠彦・谷口裕美子・中垣浩平・安田貢・東山昌央・三本木温（2020）FD委員会活動報告：Sports Coaching Competency Test. 山梨学院大学スポーツ科学研究, 3: 31-32.

荻山靖・柴田紘希・飯塚駿・麻場一徳・安田貢・森幸也（2021）FD委員会活動報告：Sports Coaching Competency Test から評価した学生のコーチング能力. 山梨学院大学スポーツ科学研究, 4: 111-114.

近藤亮介・濱中良・金高宏文・會田宏・伊藤雅充・土屋裕陸・久保田潤・渡部丞・松村直樹・石川純一（2019）コーチコンピテンシーを可視化する客観的評価テスト（SCCOT）の開発. 日本コーチング学会第30回学会大会抄録集, 35.

スポーツ庁（2015）競技力強化のための今後の支援方針（鈴木プラン）－2020年以降を見通した強力で持続可能な支援体制の構築－. https://www.mext.go.jp/sports/bmenu/sports/mcate_top07/list/detail/1377938.htm（参照日：2021年10月28日）.

スポーツ庁（2017）スポーツ参画人口の拡大に関する政府の取組について. https://www.mextgojp/sports/b_menu/shingi/001_index/bunkabukai002/attach/_icsFiles/afeldfile/2017/10/13/1396541_1.pdf（参照日：2021年11月10日）.

スポーツ庁（2018）スポーツ界におけるコンプライアンス強化ガイドライン不祥事対応事例集. https://www.mext.go.jp/sports/content/1404861_4.pdf（参照日：2022年1月23日）.

文部科学省（2012）スポーツ基本計画. https://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/_icsFiles/afeldfile/2012/04/02/1319359_3_1.pdf（参照日：2021年10月28日）.

文部科学省（2013）大阪市立桜宮高等学校における体罰事案について. https://www.mext.o.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/attach/1331577.htm.（参照日：2021年1月23日）.

文部科学省（2015）グッドコーチに向けた「7つの提言」. https://www.mext.go.jp/b_menu/hou dou/27/03/___

[icsFiles/afeldfile/2015/03/13/1355873_2.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/hou dou/27/03/___icsFiles/afeldfile/2015/03/13/1355873_2.pdf)（参照日：2020年10月26日）.

日本スポーツ協会（2016）平成27年度コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」作成事業報告書. <https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data/ikusei/doc/curriculum/modelcore.pdf>（参照日：2020年10月26日）.

日本スポーツ協会（2019）Reference Book. 公益財団法人日本スポーツ協会.